月刊
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあん
〈EKUTEBIAN VOL.16 NOVEMBER 1997 EKUTEBIAN〉
11
まい あーと■ エッグアート「宇宙の神秘」by 井上康子

キク科

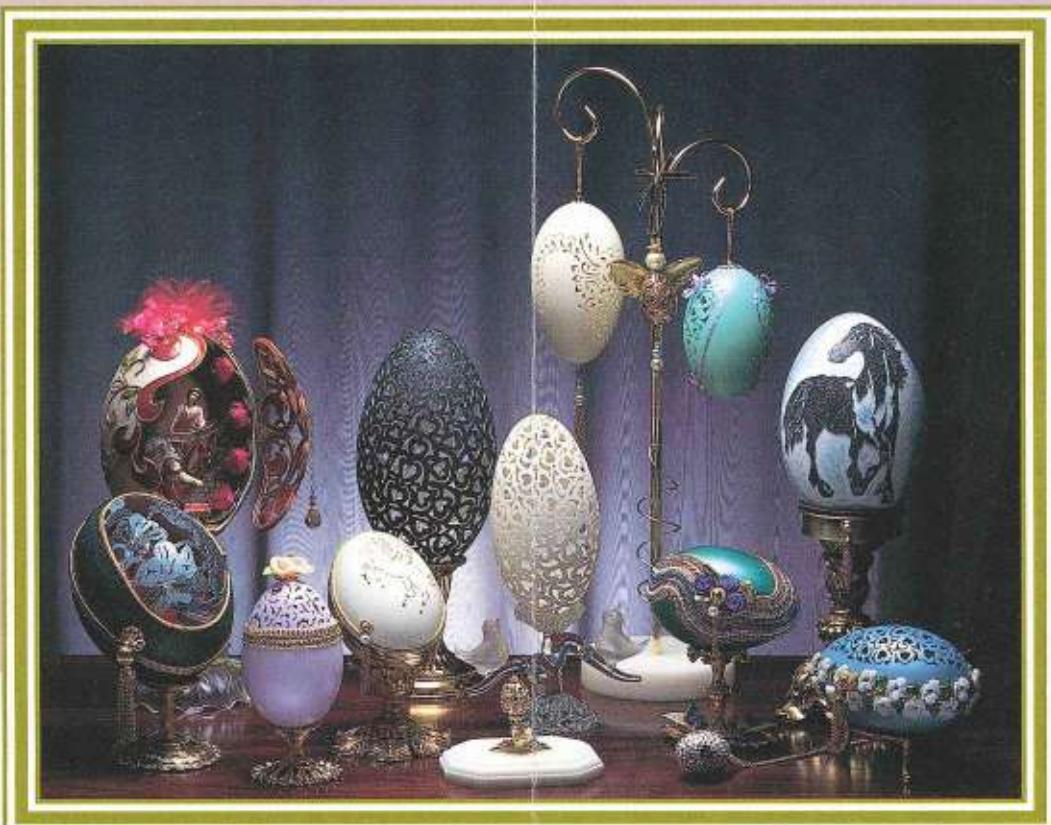
カワラノギク

撮影：宮城六郎(A) 青木和夫(B)

11月に入ると多摩川の**カワラノギク**の残り花に、早朝霜が一面に降りる朝がある。

やがて川霧の中から昇ってきた朝日が霜に当たり始めると解けて水滴になる。この時がいちばん華やかであたりは水滴がきらきらと宝石のように光輝く。そして水滴は僅かの風に落ちたり、太陽の熱で蒸発して次々と音もなく消えていく。

日がでてから解けるまでの時間は長いが、解け始めるとそれこそあっという間のできごとで、ぐずぐずしていると写し損になってしまう。

カワラノギク

この温もりを…

井上康子のエッグアートの世界

たかが卵の殻とあなどっては、いけない。ひとが技術と愛情をそそげば、ここまでアートの世界が展開される。
井上康子さん（若葉町）の得意技は、あの薄い殻に「彫刻」をほどこすにある。
歯医者さんでお目にかかる電動式のヤスリのような機械で丁寧に彫りあげてゆく。
オーストリッチ、グース、うずら、エミュー、レアエッグなどその素材は幅ひろい。
卵の殻を握っていると、手の温もりが伝わって、まるで「生きているよう」だという。
作者が集中できない時は、卵がそれを察知して壊れてしまうというからデリケートこの上ない。
いまや、井上さんのアートは海を越えてアメリカでも評価が高まりつつある。
サウザン・カリフォルニア・エッグアーティスト会員。

◆ Pureness ◆

◆ 幻想の白薔薇 ◆
（ホワイトローズ）

◆ Fascination ◆

シリーズ　この人と1時間⑤

多摩人の、多摩人による雑誌に育ってくれれば…

日向直人さん

「TAMAら・び」編集長

多摩全域をカバーする雑誌が誕生しようとしている。その名は「TAMAら・び」という。

まだ2号しか発行されていないのでどのように成長してゆくのか先は見えづらいが、来年からはいよいよ「季刊」で発行してゆくという。発行元は立川にすっかり根をおろし、地域を耕して旺盛な出版活動を続けている「けやき出版」（柴崎町3丁目）。

同社が築いてきた多摩の情報を生かして、その上に編集力を結集、どこまで読者の共感を呼ぶことができるかが愉しみなところ。しかも、読者対象は50代から60代という微妙な世代。

今月は「TAMAら・び」編集長の日向直人さんに、発刊の努力目標、その志をたっぷりと伺った。

立井　『TAMAら・び』というネーミング、随分しゃれてますね。

日向　編集部が知恵を出しあってあれこれ考えたんですけど、結局多摩の人々に読んでいただくのだから「多摩ライフ」がいいのではないかと。でも、同じネーミングで、東京都が大きなイベントをやりましたよね。編集部にフランス語をやるのがいて、「ライフ」は「ラ・ビ」と云うのだと聞いて、じゃ、『TAMAら・び』がいいということになって。

立井　うちの『えくてびあん』も「ちょっと聞いてください」というフランス語なんです。ひらがなにしたのも共通ですね。ところで創刊号が6月、第2号がこの秋ということで来年からは早くも季刊になるんだそうですね。

日向　ええ。一応2月、5月、8月、11月と季節の先取りをする形で行きたいと思っているんです。

立井　うちの編集部でも、ときどき、多摩全域を対象にした媒体が欲しいねえ、なんてユメみたいなこと云ってみるんですが、そのユメみたいな話を日向さんの所では悠然とスタートさせている、尊敬しちゃいます（笑）。

日向　いやあ、ユーゼンというわけにはいきませんけど。ちょうど「たましん」（多摩中央信用金庫）さんが地域密着型のサービスを展開されていて、高齢化社会に貢献できる方向で健康のこと、旅行のこと、生涯学習のことなどをお考えになっておられて、うちの方は出版で多摩に関してはそれなりに実績もありますから、それでは協力して一誌、創刊しようじゃないかと。

立井　ああ、それで「たましん」さんの『多摩らいふ倶楽部』の案内が載っているんですね。

日向　『多摩らいふ倶楽部』に入会すると自動的に購読できますがもちろん書店売り（定価五百円）もしてゆきます。書店で読者に手にとっていただいて読んでみたいというヴァリューがないと存在価値がないわけですから、ここ何年か編集部は真剣勝負です。

立井　早く定着するといいですね。私たち、立川の中だけを取材していますと、よく行き詰まることがあるんですが、そんな時、もっと取材範囲が広ければラクなんだけど、なんて考えてしまうんですけど、実際には多摩全域をカバーするのはご苦労が多いんでしょう。

日向　取材には手間ヒマかかりますね。どこかのガイドブックを丸写しにしたり、机上で考えたりばかりでは、どこか薄っぺらな記事になってしまうもんです。今度編集した2号目に「多摩の温泉郷を巡る」を特集したんですが、多摩には四〇くらいの温泉があるんですね。

立井　ほう、そんなにあるんですか？

日向　あるんです。企画した自分たちが驚いたくらいですから。カメラマンとモデルを連れて「巡る」んですけど、モデルは一組です。温泉に入るのって「仕事」となると相当に疲れるんです。なにしろお風呂のハシゴですからね（笑）。

立井　そういうのは体験しないと確かに分からないですね。この雑誌は高齢化社会と対応してゆくというのが一つの大きなテーマでしょうが、実際には何歳くらいの読者が狙いなんですか。

日向　これもやってみて分かったことなんですが、情報を一番欲しいのは五十代から六十代なんです。若い人の情報なら日本中にあふれておりますよね、スポーツでもグルメでも。また、七十代、八十代という高齢者向けの情報も増えてきているんです、たとえば介護の問題なんかですね。ところが五十代、六十代を対象にしている雑誌は案外ないんですね。この年代の方々への適切な情報を、というのがポイントなんです。

立井　私もその世代に入りますけれど、云われてみると、仕事上のマガジンを除くと、あまり適切なものが見当たらないように思います。

日向　定年の問題、そこから派生する夫婦、家族の問題。健康、旅行、学習などテーマは限りなくあると思うんですが、類似の雑誌がないということは「下敷き」は何もないわけですよね。

立井　かなりオリジナリティーが要求される。やりがいもあるでしょうけど。ところで「多摩」というのはどの辺までを指すんでしょうかね。

日向　一応、東京都のうち二十三区と大島などの島を除いた地域という風にとらえておりますが。ところが、実際にその地域を取材しておりますと、随分と意識がちがうんですね。たとえば、町田市へ行きますと横浜の一部くらいに感じている人がいたり、三鷹市あたりですと東京二十三区の一部という意識が強いみたいですし。奥多摩は観光地の色合いが濃いですから、他の土地とは少し違ってますね。ですから同じ「多摩人」と呼んでも、聞く人によって大分、意識が違うようです。

立井　その地域をそっくり引き受けてゆくというのは大変と云えば大変ですけれども、変化に富んでいて面白いと云えば、とても面白い地域じゃないですか。

日向　取組み方いかんということでしょうか。

立井　パイオニアというものはいつも、戸惑いが付きものですが、日向さんの所もその愉しさと苦しさを共に味わっておられる。

日向　いやあ、苦しさの方が今のところ多いんじゃないでしょうかねえ。

立井　先程の「下敷き」がないという話、これも試金石ですね。いわゆる「参考書」がないわけでしょ。まだ2号しか見ていないので先はわかりませんが、例えば守屋龍男さんが奥多摩の「低山」を案内してますよね。創刊号が「大菩薩嶺」、2号が「三頭山」ですが、このガイドなど「参考書」のない勝利で、ユニークで、どこか中高年に対する優しさが感じられますね。山の登り方でも、ガツガツしていないというのか、若者のようにエネルギッシュでなくても登山が愉しめるような気分にしてくれます。これは守屋さんというパーソナリティーのなせる技と云えるかもしれませんが。

日向　守屋先生は「けやき出版」から『多摩の低山』と『秩父の低山』という単行本がありますが、そこで先生はガイドのコツをつかんだのではないでしょうか。

立井　けやき出版さんは、単行本を通して素晴らしい著者と出会ってますから、雑誌の編集でも随分と力になってくれるでしょう。これは大きな財産ですね。

日向　もっとも、それに甘えてしまってはとんでもない方向に行ってしまいますけれども。

立井　『えくてびあん』を編集していて、いつも思うのですが、毎月新しい人に会える。この喜びは他に替え難いと思います。

日向　確かに一つの媒体を持っていると、いろいろな人に会える。他の職業では、こうはいかんでしょうね。

立井　立川だけでも、まだまだ会うべき人がたくさんいるくらいですから、多摩全域となるとこれは無尽蔵に近いんじゃないですか。それに「時代の流れ」をいち早く察知するのもまた、編集者の仕事かもしれません。先程の登山の話ですけど、ひと昔前は山登りと云えば青年のものでしたけれど、いま、青梅線に乗ると「中高年」の登山者でいっぱいですものね。

日向　ほんとにそうですね。それに、ファッション性に富んでいるというのか、色の組み合わせなんか、とってもおしゃれになってきましたね。

立井　戦後五十年たって、日本人もようやく大人らしいアソビを覚えたということですかね。

日向　私も「団塊の世代」の一人なので、自分の目線で判断していきたいと思っているんです。ただ、これがベストです、という言い方は避けたいですね。むしろ提案し続けたいです。こういう考え方がありますよ、時代はこっちの方を向いてるんじゃないでしょうかと。共感してくだされば嬉しいですけれども。

立井　創刊号を出されての反応はいかがでしたか？

日向　女性の読者からの声が多かったですね。少しカタイんじゃないかという声が随分ありました。生真面目すぎるんじゃないかと。それに編集部の反省としては、創刊号ということで、アレも載せよう、コレも読んでもらおうと詰め過ぎた感があります。創刊号と2号目が、かなり色合いが違ってきたのは、そういう反省を生かそうとしたためなんです。

立井　意外な人たちからの反応はなかったですか？

日向　たとえば、十八歳の読者からのハガキで、太極拳の記事にとても励まされたと。これは「多摩人点描」というページで、心身ともに落ち込んでいた実業界の人が太極拳に出会って立ち直ってゆく話なんですけれども、この記事の主人公の木村さんという方は五四歳です。最後にこう結んでいるんです。「取締役といってもつき合いゴルフ、麻雀の類は一切やらないで押し通しているという、全く新しいタイプの管理者像。地域の中にもしっかり足をおろして、今日もパワー全快なのである」と。

立井　通念としての管理者像をくつがえしてくれた、その感動が読者に伝わった一例でしょうね、青年の心をうった。確かに『TAMAら・び』は中高年の方に焦点をあてておるでしょうが、青年が読んでも感動するページがあるということは、深いところで「人間」に語りかけていることになりますね。もともと雑誌の編集というのは、編集者自身が面白がらなければはじまらないですから。

日向　まさにそうですね。何にでも興味がもてる体質のようなものが要求されるんじゃないかと思います。私は長いこと流通の専門誌を編集していたんですけど、初心の頃、何にでも興味を持て、おっちょこちょいと思われるくらいの方がいいんだと、よくいわれたものです。腰の軽さ、言葉を変えればフットワークの良さですかね。

立井　そんな日向さんの「体質」に期待したいですね。一誌を起こすということは、外から見ているほどラクじゃないし、また一人で出来るという性質じゃないですけど、どうか、お元気で巻を重ねて、地域に根付かせてください。

日向　地域の広さは違いますけれども、お互い、がんばっていきましょう。

東風

近頃「鉱脈」ということを、よく考える。人間、生きていて自分にふさわしい鉱脈を一つさぐり当てられれば御の字ではないだろうか◆今月号の「えくてびあんレポート」でご登場いただいた井上康子さんがエッグアートという鉱脈を掘り当てたのは五年ほど前だったという。雑誌の小さな記事で、その存在を知って、一気にのめりこんでゆく。しかし、それだけならば単なるホビーに留まっていたであろう。少し器用ならば、誰にでも到達できる地点がある。生活の「句読点」程度のことで満足するか、それともその上のレベルに突き抜けてゆくか、分岐点であろう◆井上さんの場合「アメリカ」という舞台が登場してくる。エッグアートといえば、アメリカが先進国である。そこで多くの作品を視て、技術も習得していったという。運がよかったんだ、という見方もあるであろう。環境に恵まれていたんだという見方も間違ってはおるまい。が、他人が云う前にご当人がよく知っている。それが証拠に、一つの大きな鉱脈を当てた人は、決まってご自分の口から「運がよかったんです」という言葉が返ってくる◆そうすると、自分に鉱脈という幸運を引き寄せるための方法は、自分の今の境遇に感謝して、会う人ごとに、どんなにか「私」という人間は恵まれているかを語ることにはじまるのかもしれない。明日、あなたは、カチッと鉱脈に当たるかも◆えくてびあん　ふはりと生きる　力かな

（表紙）エッグアート「宇宙の神秘」井上康子（若葉町1丁目）
（編集）池田龍男　小林康史　隅川理　名尾昭真　山田恵子　松本わかこ
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　五来孝平　スタジオ269

月刊えくてびあん　第160号
平成九年十一月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190
電話　〇四二(528)0082
FAX　〇四二(528)0065
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

連載　四字熟語（六）

一蓮托生

「いちれんたくしょう」と読む。死後、極楽浄土で同じ蓮（はす）の上に生れかわるということ。そのことから、意味が転じて、同志を誓いあった者たちが同じ行動をとり、運命を共にすることを指すようになった。

最初は、夫婦が一本の蓮華（れんげ）に身を託することを指していたが、後に他人同志についてもいうようになった。一蓮を「一連」と書くのは誤り。

えくてびあんの輪

人がいて、街があります。
あなたがいて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも　えくてびあん！

町	店名	住所	電話
幸町	いなげや 立川幸店	幸町1-23-6	☎537-1820
幸町	花奴 すずかけ通り店	幸町3-17-3	☎536-8785
幸町	ロッテリア 立川砂川九番店	幸町4-38	☎537-4413
幸町	たちばな	幸町5-2-16	☎537-0347
幸町	BSタイヤショップ 佐藤商会	幸町5-10-2	☎537-0912
砂川町	JA経済センター 立川店	砂川町2-44-3	☎536-1824
砂川町	JA東京みどり 立川支店	砂川町2-44-3	☎536-1821
若葉町	ふとんの青木寝商	若葉町1-8-1	☎536-6833
若葉町	美容室 リラ	若葉町1-11-1	☎536-3048
若葉町	みふじサイクル	若葉町1-12-4	☎536-7166
若葉町	紀ノ国屋 立川店	若葉町1-13-2	☎536-1604
若葉町	エッソ石油 けやき台ステーション	若葉町2-1	☎535-3081
若葉町	いなげや 若葉町店	若葉町3-21-1	☎537-4199
栄町	さくら	栄町2-46-3	☎536-8285
栄町	永光薬品	栄町2-58-7	☎536-0260
栄町	カットハウス ヤザワ	栄町2-59-8	☎536-6716
栄町	多摩中央信用金庫 栄町支店	栄町2-59-8	☎536-9711
栄町	手打ちそば 信更	栄町5-12-1	☎537-0991
栄町	相模屋酒店	栄町5-61-8	☎536-2476
栄町	森田接骨院	栄町6-6-25	☎535-6240
錦町	Coffee Shop 遊香	錦町1-4-24	☎527-3840
錦町	ステーキの リブレ	錦町1-8-3	☎527-1630
錦町	和菓子処 ゆうき	錦町1-8-5	☎525-0780
錦町	美容室 アリス	錦町1-15-21	☎525-1100
錦町	うちのやブルマン	錦町1-18-17	☎524-9280
錦町	むぎばたけ	錦町2-1-1	☎526-1210
錦町	池田屋商店	錦町2-1-10	☎522-3731
錦町	美容室 赤い鳥	錦町2-1-10	☎528-2389
錦町	寿屋酒店	錦町2-1-13	☎522-3625
錦町	TAPAS	錦町2-2-29	☎529-0733
錦町	振興信用組合 立川支店	錦町2-2-32	☎524-1471
錦町	三田花店	錦町2-5-23	☎524-4187
錦町	セガミ薬局	錦町2-7-8	☎525-9212
錦町	マルミヤスポーツ	錦町2-7-8	☎522-2912
錦町	アミューたちかわ（立川市民会館）	錦町3-3-20	☎526-1311(代)
錦町	そば 高尾亭	錦町5-5-31	☎522-2710
柴崎町	カフェ べる・こむーね	柴崎町2-2-7	☎529-7800
柴崎町	寿司由	柴崎町2-2-8	☎522-3733
柴崎町	関田酒店	柴崎町2-2-17	☎524-2960
柴崎町	ビストロすぎ浦	柴崎町2-2-23	☎525-9929
柴崎町	ラ・バンバ	柴崎町2-3-3	☎524-5800
柴崎町	クワトロ	柴崎町2-3-3	☎528-2983
柴崎町	マイシティハウス 立川南口支店	柴崎町2-3-6	☎526-0148
柴崎町	キャノン01ショップ	柴崎町2-3-6	☎528-1501
柴崎町	コミュニティ・ストア はなむら	柴崎町2-3-9	☎522-2491
柴崎町	ブティック リッチ	柴崎町2-3-10	☎528-2054
柴崎町	ユウ都市企画	柴崎町2-3-13	☎528-2566
柴崎町	コマツホーム	柴崎町2-4-6	☎525-5811
柴崎町	喫茶 キャリー	柴崎町2-4-7	☎528-2630
柴崎町	かみゆい処 わ	柴崎町2-4-8	☎522-8202
柴崎町	芹沢ガラス店	柴崎町2-4-8	☎522-3065
柴崎町	小室園	柴崎町2-4-8	☎522-2894
柴崎町	カフェレストラン ほまれ屋	柴崎町2-4-15	☎526-2232
柴崎町	ファッションハウス ほまれ屋	柴崎町2-4-15	☎525-2788
柴崎町	オーロール焼きたて 立川店	柴崎町2-4-15	☎527-9473
柴崎町	ぼだい樹	柴崎町2-4-18	☎528-0556

私の立川原風景 第四回

鈴木克吉（柴崎町）

◆ 多摩川暮色 ◆

多摩川の近くで生まれ育ち、昭和三十年代に少年期を過ごした。私は「清流」多摩川を体感した、最後の世代かもしれない。その後、カジカ・イモリ・ホタルが姿を消し、蛇籠（じゃかご）や寄せ網で漁をする人、水しぶきに奇声をあげる子供たちもいつか見かけなくなった。

現在、立川付近の多摩川は「清流」という言葉が過去のものになってしまった。もう一度水遊びで冷たく疲れた体を、河原の石で温めてみたい。

（フォトグラファー）